



# 2010 京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



2010 Mutual Faculty Development

2011年3月 京都大学FD研究検討委員会



- 京都大学FD研究検討委員会では、主催事業の一つとして、「公開授業・検討会」を開催しています。
- 公開授業・検討会は、
  - (1) 普段の授業の一コマを公開し、関心のある教員が傍聴する「公開授業」と、
  - (2) 当該授業のねらいや進行方法について振り返り、よりよい授業について互いに考え合う「検討会」との2部構成で実施しています。
- 公開授業・検討会は、高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた事業ですが、2008(平成20)年度からは本委員会の主催として年2~4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。
- 2009(平成21)年度からは、これまでの公開授業・検討会に加え、文学研究科プレFDプロジェクトとして、同研究科のOD(オーバードクター)が担当する学部生向けゼミナールを公開し、授業終了後検討会をおこなっています。
- 2010(平成22)年度からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーを実施しています。

## 京都大学のFDと相互研修型FD

FD研究検討委員会委員長  
高等教育研究開発推進センター長 田中 每実



京都大学ではFDに関する様々な取り組みがおこなわれています。本報告書はその一端を学内の皆様にご紹介するために、全学委員会であるFD研究検討委員会が毎年作成しているものです。

京都大学のFDのうち、最も歴史あるものの一つが本報告で取り上げている公開授業・検討会です。公開授業・検討会は、高等教育教授システム開発センター（現・高等教育研究開発推進センター）が全国の大学で初めて、1996年度から1999年度にかけて実施した、公開実験授業プロジェクトに端を発しています。

高等教育研究開発推進センターでは、設立以来、「相互研修型FD」を理念として活動を進めてきています。相互研修型FDとは、それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団として形成されていくことをめざすものであり、従来わが国に見られがちだった、啓蒙型・操作型のFDとは対比的な考え方です。公開授業・検討会は、一つの授業を様々な分野の教員が集団的に検討する大学教員の相互研修と位置づけられるものであり、相互研修型FDの理念を具体化する重要な取組であると考えています。その意味で、公開授業・検討会が2008年度から全学委員会の下での事業として実施されることになったことには大きな意義があると思っています。

私自身、何度も授業を公開し、検討会で振り返りの時間を持った経験からして、大学の同僚でありプロである他の教員に対して授業を公開することには、並大抵ではない気構えが必要であることはよく承知しているつもりです。快く授業を公開して下さる数々の教員の方々の勇気とご協力に、改めて感謝と敬意を捧げたいと思います。

また、公開授業・検討会に参加される教員の方々にとっては、公開される授業が、ご自身の専門分野と直接的に関連していることは少ないと思いますが、全体のカリキュラムの中で授業をどう位置づけているか、学生との関係で授業をどう組み立てているか、学生の反応にどう対処しているか、といった視点で見えていくと、授業改善そして教育改善へのヒントが数多く得られると思います。そして何より、変わる学生を前にして、試行錯誤しながら授業に取り組んでいる多くの同僚と経験を共有できると思います。

なお、部局主催のFD事業でも、各教員からご自身の授業について紹介される機会が増えており、相互研修型FDの一環として注目しています。昨年度（平成21年度）からは、本委員会と文学研究科との連携により、文学研究科ブレFDプロジェクトをおこなっています。教員各位、またODなどの正規ファカルティ予備集団が自主的な授業改善・教育改善に向けて、こうした様々な機会を活用していただきますことを願っております。

さらに、本年度（平成22年度）からは、本委員会主催による「勉強会」および高等教育研究開発推進センターとの共催による新任教員教育セミナーが新たに実施されています。その詳細については本報告書にも掲載していますので、ぜひご参照ください。

京都大学のFDに関する取り組みは、いずれも研究大学としてふさわしい教育・研修プロジェクトです。学内でこうした自主的な授業改善・教育改善に向けた取り組みが、さらにひろがることを強く期待しています。

## ◇ 2010.7.20 火

公開授業 10:30~12:00 (吉田南構内 共北12)  
 検討会 12:15~13:15 (吉田南構内 吉田南1号館201)

### 第1回 公開授業・検討会

## 「心理的ストレスと適応」

全学共通教育科目A群



及川 恵

(高等教育研究開発推進センター特定准教授)

## 1. 科目の概要

### (1) カリキュラム上の位置付け

本授業は全学部の学生を対象として開講される全学共通科目である。全学共通科目は、A群(人文科学系及び社会科学系科目)、B群(自然科学系科目)、C群(外国語科目)、D群(保健体育科目)、EX群(大学コンソーシアム京都単位互換科目)の5群に区分されている。本授業は健康心理学、臨床心理学、社会心理学などの基礎的知識を取り上げる内容であり、A群に含まれる。

(2) 授業形態	講義
(3) 単位数	2単位
(4) 対象学生	全回生
(5) 受講者数	約15名

### (6) 授業のテーマと目的

近年、抑うつやストレスといったテーマは非常に身近なものになってきているが、専門的に学ぶ機会は限られている。青年期という時期に、ストレスの問題や関連要因について知識を得ることは、今後の自らのストレス対処を考えていくためにも重要であると思われる。本授業では、健康心理学や臨床心理学、社会心理学などの理論や研究知見に基づき、心理的ストレスや適応に関連する要因を取り上げていく。ワークやグループディスカッションを通して、これまでのストレス対処を振り返ると共に、自己理解や他者理解を深めること、自己や他者の心身の健康を高めるためのアプローチに関する理解を深めることが目指される。

### (7) 成績評価方法

毎回の感想シート、授業中のグループワークや発表、課題への参加度、毎週の課題提出やレポート・試験などをもとに評価する。

## 2. 公開授業

### (1) 授業計画上の位置付け

公開授業は最終回の授業であった。授業の前半は、ストレス研究の概観、パーソナリティや帰属スタイル、ソーシャルサポート、対人コミュニケーション等のテーマについて、心理的ストレスと関連づけて取り上げ、ディスカッションを行ってきた。最終回の直前4回では、特に大学生が経験しやすいストレスや自らのストレス対処をテーマとし、次週に扱う内容に関連するホームワークを事前にやってきてもらい、ディスカッションの題材とした。公開授業はこれまでの授業全体のまとめを行い、学生の感想を踏まえて補足説明を行うことや、これまでの授業で扱えなかった内容の紹介、今後の興味関心につながるような内容の紹介を行う回とした。

### (2) 公開授業の流れ

最大50名ほどが入れる一般的な講義室。パワーポイントスライドと、スライドを印刷した配付資料を使用。当日出席した学生は9名で、すべて1回生。今回は最終回の授業。

### 10:30 これまでの授業の全般的な復習、議論 :導入

これまでの授業の復習を、実習を行った後半4回を中心に行った。その後、1.「自己理解とストレス対処」の授業に関する感想・評価、2.作成してきた小レポートをもとに「授業でなかったこと」、「どれが実行できると思うか」、「特に印象に残ったもの、楽しかったもの、役立ったものはどれか」という点について5分ほど議論を行わせた。



- ★ 議論の最中も、授業者は適宜学生のグループに声をかけ、議論が進んでいるかどうか、どのような議論が行われているのかなどを確認している。議論の結果としては、「気晴らし・リラクゼーションが実行できそう。授業内で実際にやってみてよかった」、「ディスカッションや実践形式の授業が楽しかった、他の人からの意見を取り入れることがよかったと思う」などの感想が学生から出された。

### 11:00 これまでの授業のまとめ :ストレスについて

ストレスに関する理論やこれまでの授業で取り上げた内容について復習を行った。ストレス研究の歴史を概観する中で、様々なライフイベントに対してストレス値を付与したライフイベント研究について紹介した。ライフイベント研究に関する批判点として個人差や文化差、性差などが考慮されていないという意見を踏まえた上で、心理学的ストレスモデルについての復習に移行した。このモデルはストレス対処の個人差が重視されなかったストレス研究に対する批判から生まれたものであり、学生が議論を通してストレス研究の歴史を体験できたことがうかがえた。

### 11:20 これまでの授業のまとめ :抑うつの認知理論について

抑うつについて、出来事の原因を何と考えるか(原因帰属)、ネガティブな気分への反応の仕方(反応スタイル)などについて紹介が行われた。続いて、ネガティブな出来事に対する極端に歪んだ考え方(認知の歪み)について紹介があり、そこに焦点をあてるアプローチである心理的援助としての認知行動療法の考え方について解説が行われた。



### 11:30 これまでの授業のまとめ :認知行動療法について

認知行動療法の概略についての説明が行われた。認知行動療法はセルフコントロールが重要であり、自分自身で問題への対処の幅を広げることが重要であることが紹介された。

- ★ ここで、ストレス状況の具体例を提示し、グループワークを行う。このグループワークは、ある状況における自分の認知を客観化するための方法の1つを体験するものであり、学生が手探り状態で行う活動となるため、授業者は適宜グループを回り、学生の質問に答えるなどといった介入を行う。

最後に授業者によって認知行動療法についてまとめが行われた。認知行動療法は個人の中での相互作用を重視しており、その要素に着目することが重要であるということ、また、環境との相互作用も重視しており、個人内、個人間の中で生じている悪循環を解いていくことが重要であることが述べられた。

### 11:40 これまでの授業のまとめ :全体のまとめ

本授業のテーマは個人の健康増進と予防が目的であったこと、予防には「一次予防(疾患自体の予防)」「二次予防(早期発見・早期治療)」「三次予防(再発防止)」の3つがあり、経験する可能性が高い抑うつのような問題については、一次予防が重要になることが確認された。また、本授業ではストレスに関連する多様な要因のうち、心理社会的要因に着目して取り上げてきたという解説がなされた。最後に生物心理社会的モデルが提示され、健康を多面的に捉えていく必要性を指摘して授業は終了した。

### 3. 検討会

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員

◇ この授業は介入授業であるということであるが、その点について説明してほしい。

◆ 介入授業は最終回を除く後半4回分の授業を指している。他の回でもディスカッション等を行っているが、理論的説明に重点が置かれており、この4回では特に授業を通じてストレス対処に対する自信をつけてもらうことを意図して授業を組んでいるため、介入授業という説明をしている。具体的には、グループワークやホームワークを取り入れており、それを通じてストレス対処に対する自信が向上するような構成にしている。初回の授業の時に学生にはその点を伝えている。



◇ 話の内容と受講している学生の志向性が合っている気がした。ただ、こういう授業を行うと、問題を抱えた学生を引き付けてしまったり、学生の内面の問題を引き出してしまいう可能性もある。そういう点について対処を考えているのか。

◆ オリエンテーションで授業の趣旨やディスカッションが多い点などを説明し、自分では難しいという場合には受講を再考してほしいということは伝えている。今回は少人数だったため個別の学生の様子を見ながら授業をすることができたと考えている。また、授業として行うため、ストレスや抑うつに関連する心理学的知識や研究知見について知的に理解してもらいたいという意図がある。過度の自己開示を防ぎ、ディスカッションで多面的な見方を出しやすくするため、大学生が共通に経験するようなストレス状況を題材にディスカッションやワークを行っている。



◇ 授業内でグループワークを行った時に、その都度その意図を説明していたのか。

◆ ディスカッションをした後に、それに関する専門的な理論を説明する順序で授業を構成している。その理論の説明によってディスカッションの意図を伝えられると思う。

◇ 自分の経験として、知識の与え方とディスカッションの仕方のバランスに苦労することが多い。今回の授業は比較的ディスカッションが軽めに行われていた。今回のようなバランスのとり方をした意図はどこにあるのか。また、男女で分かれてグループワークが行われていたが、その組み合わせを考慮するという事はなかったのか。

◆ 今日の内容は学生にとっては新しい内容ではなかったのでディスカッションは軽めでもよいと考えた。たとえば、これまでの場合には、学生個々人で取り組んでもらった後で内容についてディスカッションを行ったり、同じテーマについて題材を変えて複数回ワークを行うこともあった。今日は時間が限られており、また、技法の習得というよりは紹介であったため、最初からグループワークの形態で行った。グループの組み合わせに関しては、男女を混ぜるなど意図的に構成を変えて行った回もあるが、話しやすい人同士で組んでもらったほうがよいこともあるので、グループの構成に介入することはあまりなかった。

◇ 今回はこれまでの授業の復習であった。その学期の復習に1回分の授業を当てられるのは贅沢だなと感じた。逆に、全部復習で1回はどうなのだろうとも思ったが、学生のリフレクションシートを見ると評価も高いので、学生が授業者の流れにのって授業に取り組んでいた感がある。

◇ 授業で使用している教室は声（音）を吸う構造になっており、空調がうるさい。グループワークの発表が互いに聞こえにくかったのではないだろうか。また、パワーポイントと配布資料の扱いについては、全てのスライドを配布資料として配布してしまうと、学生がスライドに目をやらないので、口頭の説明で指示語を使っても、説明が十分に学生に届かないことがあるかもしれないと感じた。

◆ 空調の点は意識していなかった。ディスカッションの際には、学生の意見を自分が正しく理解しているかどうかの確認と他のグループの意見に触れる意味でも、学生が意見を言った後、教員がそれをまとめて返すということを行っていた。音が聞こえにくいという状況に少しは役立ったかもしれない。パワーポイントについては、前半の授業ではスライドそのものを配布するのではなく、別途資料を用意したが、スライドを全部配布すると内容に集中できるという反面、強調点が不明瞭になることや、メリハリをつけにくいということはあるかもしれない。



#### 4. 公開授業担当教員のコメント

これまで聴き手として参加してきた公開授業において、自分が授業者になるということは非常に特別な経験であり、この授業のテーマでもある心理的ストレスを経験する場でもありました。授業の過程では、それも一つの話題として扱い、教員もストレスを抱える1人の人間であるという、教員側の自己開示として使っていました。

普段、授業について自分なりに振り返りをしているものの、それは閉じた経験であったと感じています。今回の公開授業を通して、他の先生方からの意見をうかがうことができ、自分の授業を多面的に見直すと共に、ディスカッションを深め、学生の知的好奇心をより高めるために、今後どのような工夫ができるのかについて考える機会となりました。また、今回、自分が公開授業で得た成果は、自分の授業に対する思い入れ、自分の授業者としての思いにあらためて気づくことができた点だと思っています。



## ◇ 2010.10.5 火

公開授業 10:30~12:00 (本部構内 電気総合館 1F 大講義室)  
 検討会 12:30~13:30 (本部構内 電気総合館 3F 大会議室)

### 第2回 公開授業・検討会

## 「半導体工学」

工学部専門科目



須田 淳

(工学研究科准教授)

## 1. 科目の概要

### (1) カリキュラム上の位置付け

本授業は工学部電気電子工学科2回生配当の専門科目である。電気電子工学科では、1~2回生には、学科がカバーする幅広い分野の共通基盤となる、基礎的な専門科目を配当している。3~4回生には、より専門性の高い専門科目を配当し、各自が希望に応じて専門分野を選択するようになっている。本授業は、将来の専門分野に関わらず電気電子工学科の学生として身につけるべき半導体工学の基礎を履修する科目である。

(2) 授業形態	講義
(3) 単位数	2単位
(4) 対象学生	2回生
(5) 受講者数	約120名

### (6) 授業のテーマと目的

半導体デバイスはあらゆる電子回路に使用されており、今日のエレクトロニクスの立役者である。あらゆる電子、情報機器に用いられている大規模集積回路(LSI)、無線通信の高周波エレクトロニクス、光通信やディスプレイなどのオプトエレクトロニクス、電車や電気自動車に使用されるパワーエレクトロニクスなど、電気電子工学の幅広い分野で半導体デバイスの基礎知識が必要とされる。本講義では、半導体の基礎物性、pn接合の理論、半導体デバイスの基本形であるダイオードとトランジスタについて学習する。授業の目標を一言で言えば、「ダイオードおよびトランジスタの動作原理(デバイス物理)を自分の言葉でしっかりと説明できるようになること」である。さまざまな物理現象を自在に駆使し、創意工夫によりユニークな機能を実現してきた半導体デバイスの学習を通じて、学生達に「創造する物理学(応用物理)」の面白さを伝えることも心がけている。

### (7) 成績評価方法

出欠はとらず、定期試験の結果により評価する。理解度確認、復習のためにレポートを2回程度出題している。(提出は任意。)また、演習問題代わりに過去の試験問題数年分をウェブ上(工学部講義資料サイト <http://www.t.kyoto-u.ac.jp/lecturenotes/>)で公開している。レポート、過去問共に模範解答は公開していない。

## 2. 公開授業

### (1) 授業計画上の位置付け

半導体工学はエレクトロニクスの中核をなす重要な科目なのだが、量子力学や統計力学、電磁気学などが背景にあり、難解な科目でもある。授業の初回である今回は、太陽電池や発光ダイオード、トランジスタなどの半導体デバイスを実際に見せ、動作を演示することで、半導体デバイスが現代社会にとって極めて重要な存在であることを学生に理解(納得)させ、その上で、この講義を通じて、半導体デバイスの動作原理をしっかり説明できるようになるという目標をしっかり持ってもらうことに注力した。学生の興味、モチベーションを高め、学習目標が社会(産業)とどのようにつながるかを理解してもらえば、今後の授業で、多少難しいところがあっても頑張ることができる。



## (2) 公開授業の流れ

電気電子工学科で最も大きな定員220名の階段状大講義室。プリント（講義資料Webサイトの説明、教科書、参考文献の説明）を配布し、説明には正面の黒板と、書画カメラを接続したビデオプロジェクター(以後、OHPと呼ぶ)を使用。

### 10:36 授業の趣旨を説明

当日の受講生は約120名。(電気電子工学科2回生のほぼ全員が履修。)授業の根本的な趣旨について、「(半導体工学の勉強を通じて)知識を持ち、それをもとに考える方法論を身につけること、つまり皆さんに本当の意味で賢くなってもらうこと」と説明。勉強の仕方として、公式や説明文を暗記するのではなく、基本原理をしっかりと理解し、その原理からいろいろなことを導き出す力を身につけて欲しいと説明する。

半導体工学の基礎となる前期の物性デバイス基礎論(担当教員:須田・木本)について「難しかった人は?」と学生に挙手させる。2~3割が挙手。前期が難しかったからといって今期の半導体工学をあきらめないようにアドバイス。前期に「不可」だった人が、後期に「優」を取る場合もあることを紹介。やる気でカバーできることを強調。



### 10:38 導入

「TV・新聞・ネットなどで半導体という言葉を見たことある人は?」と挙手させる。電子電気工学科卒業生に企業が期待する専門基礎知識は何なのかを説明。卒業後、電力や情報システムなど、半導体と直接関わりのないと思われるような分野で仕事をすると、半導体工学の知識や考え方が役に立ち、電気電子工学に関わる広い視野を持っていることが、強みになることを説明する。「半導体を実際に見たことがある人は?」と問いかける。3分の1程度の学生が挙手。そこで授業者は「どんなところで見た?」と何人かの学生に声をかけてやりとりをする。

### 10:43 板書

前期の物性デバイス基礎論の復習として導体、半導体、絶縁体の違いを板書で説明。前期の物性デバイス基礎論で勉強したことが後期の半導体工学で役に立つことを説明。前期よく分からなかった人も、後期、この授業で勉強すると、前期の意味が分かってくることを説明。

★ 板書を始める前には、「ここからノートをとってほしい」とあらかじめ学生に注意を促した上でおこなっている。(今回は概論であるため、試験に出ないと思ってノートを取らず漫然と聞いてしまうことを防ぐため。)

### 10:48 学生への質問

半導体デバイスの具体名称を挙げるよう、1列を順に後ろへと学生を指名していく。学生の答えを次々と板書する。半導体デバイスの最も基本としてダイオードとトランジスタがあることを説明し、これらは、2回生前期の電気電子工学実験A(必修科目)でダイオードやトランジスタを使った回路を作ったり、特性を測定したりしたものである、半導体はここにいる全員が見たことのあるものだということを強調。(先ほど3分の1しか手を上げなかった。)黒板一杯にデバイスが列挙されるがまだまだあると問いかける。皆さんが身につけているものがあるとクイズを出し、何人目かの学生が「携帯のカメラですか?」と答える。昔のビデオカメラは真空管で大きかったが、今は半導体のCCDやCMOSセンサーでとても小型軽量になっていることを述べる。

★ 学生からの答えが少ない場合には、「間違えることは気にせずに、思いついたことを言ってみよう」と学生に語りかける。また、授業者自身の経験を踏まえ、アメリカの大学の授業では学生は間違えたことも堂々と意見として発言し、非常に基礎的なことであっても積極的に質問していたというエピソードを挿入し、どんどん発言するように促している。

### 3. 検討会

◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員

- ◆ 私自身、授業を初めて担当した1年目は突っ走ってしまい、難しすぎる話をしてしまった。学生の反応や提出されたレポートの解答や感想、テストの出来を見ながら改訂を重ね今の授業内容になった。昔に比べれば、今回の授業のようにモチベーションを高めるためにかなり時間を取り、授業での説明も懇切丁寧に行っている。私は、頼まれて私立大学で非常勤で半導体の講義をしている。そこでは、毎回の出席調査や小テスト、講義時間中のレポート解説など、私から見れば高校や予備校のような授業が推奨されていたが、そのような授業を京大ではやりたくないという気持ちはある。親切に説明はするけれども内容のレベルは落とさないようにしているし、出席点などもつけない。板書についても、私としてはかなり親切にしているつもりだが、少数の学生は、遑って書き足すのはやめて欲しいとか、系統的に書いて欲しい（あたかも参考書の1ページのように書けということか?）と（さすがに口頭では言ってこないが）レポートの最後の設問（感想や要望を書け）に書いてくる。社会人になって、会議の議事録を頼まれたとき、「ホワイトボードに書くときは、私がメモしやすいように書いてください」などと文句を言えないのだから、私の板書程度に対応できないようであればだめだ、君たちの方が修行しなさいと学生に言っている。



- ◇ 今、須田先生が、1年目は難しすぎたのでチューニングしながら今に至ったということをおっしゃった。そのようなレベルの学生を博士課程のレベルに上げていくのは非常に難しいと思うのだが、先端はどんどん発達していく中、どのようにこれから学部としては対応しているかと考えているか。
- ◆ 今の学生の3割は昔の京大生と変わらず、非常に頭が良く、向学心、自立心も旺盛だと思う。20年前の難しくて親切とは言い難い京都大学の授業を聞いても、しっかり勉強してついて行けるだろう。問題は、残りの7割が、(大学生としての勉強に対する姿勢という意味で)真ん中から下の方に広く裾野が広

がってしまったことだと思う。受験勉強に特化してしまい（毒されてしまい）、お膳立てしないと勉強ができない（お膳立てすると大変真面目に勉強する）、また、科学技術に対する関心が希薄な学生が増えていることが問題だと思う。何かきっかけや刺激を与え、彼らに1・2回生のうちに目覚めてもらうことが重要だと考えている。この授業で導入に1コマを当てているのも、そのような刺激の一つになれば、という思いである。

- ◇ 昔のことは分からないが、いつもこういう話を聞いて思うのは、そこまで学生のレベルがひどいのだろうか?ということである。学生は知らないだけであって、面白いと思わせ、こっちを向かせれば、昔の学生とそれほど変わらないと思っている。
- ◇ 私は3年前まで他の国立大学（京大と同じ研究型）にいたので相対的な評価になるけれども、学生のメンタリティは違っている。その大学では、前3列くらいに座る学生は授業にインタラクションして来る。京大の学生は1列目くらいしかインタラクションをして来ない。確かに京大生のほうが計算などは速いのだけれども、受験で疲れてしまっているのかなという風にも思う。
- ◇ 私も他大学出身であるが、京大で4回生で研究室に配属されてくる学生を見る限りでは、学生というのはそれほど差がないのかなと思う。興味を持ってばやってくれると思う。一方で、2~3回生の学生実験を担当してみると、電気などにあまり興味を持たないで入ってきてしまったのかなという感じもする。パソコンなど、ある意味当たり前だと思っている学生が多いのだが、その中で物理などの必要性を分かってもらえればと思っている。
- ◆ 学生の技術に対する感度（興味、関心）が低下しているので、そこに非常にエネルギーを使う。電気電子工学科で数年前から開催しているサマーキャンプ（電気電子工学科で開催しているプロジェクト達成型の夏期課外授業、ロボットや電子回路、気球の自動制御などにチームや個人で取り組む）に自発的に参加する学生（120名中20~30名）がいる一方で、不参加者にアンケートを行うと、不参加者の3人に1人は「興味がないから」という理由だったりする。模試の偏差値の合格安全圏だったから電気電子工学科を選んだという学生もいて、その学生たちは頑固なのでなかなか大変である。ただ、今日の授業で取って頂いた学生アンケートをざっと眺めると、ほとんどの学生が半導体に興味を持ってみたいなので、やった甲斐はあったかな、と思ったりする。

## ◇ 検討会参加者 ◆ 公開授業担当教員

- ◆ 授業の内容（項目）は、自分が学生の頃（20年前）の講義よりも3割カットしている。優秀な学生はさておき、まだ目覚めていない学生に授業についてきてもらえるように丁寧に説明しようとする、時間的に内容的には3割カットということになる。今は2回生なので、まずは受験勉強から脱却してもらい、3回生で助走をつけて、研究室に来るころには、自発的に勉強できるようになってくれればと思っている。
- ◇ 2回生配当で電子回路があるが、（半導体工学と同じように）2回生で学ぶのには少し難しい。なので、後で自分で勉強できるようにしてあげればいいというように考えてやっている。学生のやる気と能力に頼るといことになるのかなと思う。
- ◇ 今日の授業で、須田先生自身が学生の時にどんなことに興味を持ちどんなことに興奮したのかが、私などは同じ世代なので非常に共感できるものとして伝わってきた。しかし、これが学生に伝わっているのかどうかは分からない。これを伝えるためにはどうしたらいいのか。教員との一体感があれば今の学生も聞いてくれると思っているので、今日は教育の専門家の先生がいるので、学生にうまく伝える方法があるのであれば是非知りたいと思う。
- ◇ 教育の専門家といっても大学教育になると領域別でかなり特色があるので何も言うことができないが、須田先生の今日の授業では動機づけについて考えられることは全てやっていたと思う。かつての半導体業界のようにキラキラとした憧れの世界であったものが日常的になってしまった今日、いかに興味を持ってもらえるのかということ、須田先生は授業の中でありとあらゆる方法でやっていたと思う。あれで興味を持ってもらえないようであれば、もう仕方ないと思えるほどのものであった。
- ◇ 研究の道に進む学生、企業に就職する学生の両方に対して響くように授業の意味をお話されたと思う。キャリアとの関連づけもされていたと思う。
- ◇ 学生への動機づけに関して、授業間の結びつけを説明し、また、生活とのつながりを説明していたことで、対象への見方が変わってくるのではないかと感じられた。あれだけの講義で学生を巻き込んで授業を進めていたのはすばらしいと思った。また、社会に出てから役立つことが何かというメッセージ性があったと思う。
- ◇ 先ほどの内容を3割減しているというお話について、もっと勉強したいという学生に自学自習をさせるようなことをやっているか。
- ◆ この授業で「優」をとっても、それは半導体工学の入門編の優であって、半導体工学は非常に奥が深いということ、学生には言っている。学部レベルでも、もっと難しいことがたくさんあるし、研究室に行けば、今の100倍以上難しいかもしれないが、この授業で半導体が面白いと思えば、後は研究室に入ってからいくらでも勉強できると学生に言っている。レポートなどの端に追加で、私が大学院生の頃に解くのに苦労した問題をオマケでつけてたりして、できる学生には刺激を与えている。この問題が解ければ、学生の頃の私より今の君の方が賢いよ、と。
- ◆ 授業に学生を参加（単にノートを取っているのは出席でしかない）させることは重要だと考えている。今回はしなかったが、一通り原理などの解説が終わった後に、原理の理解を問う簡単なクイズを出して学生に挙手をさせている。2択や3択なのでどれかに挙げればいわけだが、1回目の集計では、出席者の半分くらいしか手を上げていない。全員がどれかに上げるまで、しつこく2、3回集計し直すと、最終的にはどれかに手を上げてくれる。このクイズは毎授業1回はやるように心がけている。今期、電気電子工学科でクリッカーを試験導入（2回生全員に貸与）したのは、このようなクイズを取り入れやすくし、授業への学生の参加をより高めるねらいからである。クリックではなくしっかり手を上げる、とも思うのだが、クリッカーにより回答率は高くなるし、他の答に引っ張られずに本当の正答率を知ることができるので威力はあると思う。
- ◇ 授業の目的をはっきりとおっしゃっていたが、担当当初からずっとそのようにしているのか。大抵そういうのは言わないので、学生向けに、自分が語るところから汲み取ってほしいののだが、調整されたのかなと思ったので。
- ◆ 教科書を見る、授業の力の入れ具合を見る、過去問を見るなど、授業のポイントがどこかを知る手段は複数あって、その気になれば分かるはずなのだが、それを汲み取れない学生が徐々に増えてきた。何の為にやっているか分からず板書だけを取っている学生が最も不幸なので、目的を明言するようにしている。目標は明確にしてはいるが、あまり絞り込むと暗記型になってしまうので、原理を理解することを目標にしている。

- ◇ 目標を明確にする、というのは今の授業の作り方でよく言われていることなのだが、どういう一般性のレベルで書くのが重要である。外面的行動になればいいということではなく。
- ◇ 具体的でありつつ表層的でないというのがいいと思う。
- ◇ 賢くなってほしい、と言った後に、具体的な目標を言うことで、学生にとってマップが作りやすいのではないかと思った。今後の毎回の授業ではどのように進めていくのか。
- ◆ 2回目以降の授業では、授業の始めに小目的（小テーマ）を1つ、2つ提示して、これは全体（例えばダイオードの原理理解）に対してこういう段階の部分だと明確化してから、授業（その解説）を始めている。これらが数コマ分積み上がると、例えばダイオードの基本原理が説明できるという感じにしている。毎週の小目標や全体に対する位置づけは、教科書で予習していれば、自分で見い出せるはずなので本来は要らないことなのではあるが、今の2回生を見ていると、半数くらいの学生にはこのようなサポートが必要だと感じている。
- ◇ 親切の意味が分かったように思う。須田先生が学生に対して常に、「人生、授業、単元、などそれぞれのレベルで君は今そこにいるのだ」ということを示しているように思った。



- ◇ いったん今の学生のレベルに下げるしか上げていく方法はなく、そのレベルまで下がるというのは不可避だと思う。
- ◆ 企業から京大電気電子卒に対する期待、信頼があると感じている。その期待に応えるためにも学生のクオリティを保つのは大事であり、そのための努力を続けなければならない。学生にも「先輩達の活躍のお陰で電気電子のブランドがある。就職には有利だが、入社してからハズレだったと思われぬようにしっかりと勉強して欲しい」と言っている。

## 4. 公開授業担当教員のコメント

数年かけて自分なりに確立した授業方法でしたが、教育を専門とする先生方、電気電子工学科の先生方から、たくさんの賛同やお褒めの言葉を頂き、自信と励みになりました。4回生の専門性の高い授業ならば、本当に分野を勉強する気のある者だけを相手に授業をすれば良いと思うのですが、2回生の基礎的な授業ですので、勉強もせずに半導体は嫌いという学生をなくすということと、大学生らしい学生になってもらうために、勉強に対する考え方や姿勢を伝えることに主眼を置いて改善を進めてきました。それなりの手応えは感じられるようになりました。

ここ数年、チビっ子理科教室や高校での出前授業、オープンキャンパスのゼミ、社会人向けの半導体の基礎勉強会の主宰、京都大学以外での授業など、いろいろな経験をしました。いろいろな相手や場面で教えた経験が京大での授業を見直す上で大変参考になったと思っています。

今回公開させて頂いたのは、最も学生の興味をひきやすい初回でした。3回目、4回目と黒板に式や図がたくさんあって、難しい内容の時の授業を見て頂いていたら、いろいろ厳しい指摘があったかも知れませんが、今回見て頂いた後期の半導体工学に比べると、前期の物性デバイス基礎論は評判が良くありません。（同じようにやっているつもりですが、難解だったという感想が多い。）前期でさらに改善を重ね、数年後には、前期の一番の難所をやる回をまた公開授業させて頂ければと思っています。

今回、授業公開で電気電子工学科の先生方が多数来て下さったのは非常に良かったと思います。学科の専門科目は互いに密接な関係があり、本来ならば、気軽にそれぞれの授業を聴講できると良いのですが、なかなか良い機会がありません。今回の公開授業を機に、電気電子工学科内での教員による相互聴講が増えれば良いと思っています。（私の授業は学生の邪魔にならない限り学科内と言わず学内のみなさんはいつでも聴講歓迎です。ご一報下さい。）

私は電気電子工学科のことしか知りませんが、京大生の良さは、研究室に配属されてからの伸びが凄いということだと思います。学生向けの賞を総なめしている優秀な学生が研究室にいるのですが、実は半導体の授業は真面目に聞いていなかった、などと聞くとズッコケながらも京大生らしいと感じます。授業での大人数に向けた教育も重要だと思いますが、私は研究室でのマンツーマンの指導をとっても大切なものだと思います。それが京大の強みだと。

最後に、公開授業をアレンジして頂いた高等教育研究開発推進センターの皆様、公開授業にご参加頂き、意見を下さった電気電子工学科の先生方に感謝いたします。

## プレFDとは

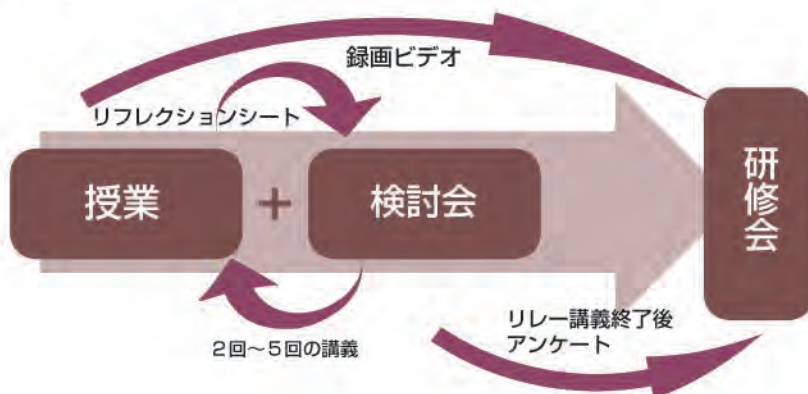
プレFDとはPFF(Preparing Future Faculty)プログラムとも呼ばれ、大学教員のキャリアに向けて大学院生(主に博士後期課程学生。ポスドクも含む)を準備させることです。日本国内でも、研究大学を中心として様々な取り組みが見られるようになりました。大学教員の職務を教育、研究、社会貢献、管理・運営に分類した場合、プレFDは本来、それぞれの役割に関する理解、知識や技術の獲得、あるいは意欲や信念の醸成などをめざすものですが、とりわけ大学教育への準備を意図した取り組みが近年の課題となっています。本学での取り組みもその一つです。

## 文学研究科プレFDプロジェクトとは？



文学研究科准教授 出口 康夫

2009年度から始まった本プロジェクトも二年目を迎えました。本年度からは、思想文化学系、現代文化学系に加え、新たに(社会学・心理学・言語学・地理学の各専修を擁する)行動文化学系も加わり、これら三つの系がそれぞれ開講する「系ゼミナール」、即ち「OD(オーバードクター)リレー講義」がプレFDの対象となっています。二年目に入り、「公開授業+授業後の検討会+半期に一度の研修会」というプレFDのメニューもしっかり定着しつつあります。また本年度のプレFDを現場で支えているのは、本研究科の特別研究員たちですが、彼女ら/彼らは、いずれも昨年度のプレFD体験者です。プレFDの一参加者から、それを運営する側へ。文学研究科プレFDからは、未来の「FD活動の担い手たち」も着実に育ちつつあるのです。



## 文学研究科プレFDプロジェクトを振り返って 各系のコーディネーターから

思想文化系前期はほとんど哲学史の全時期をとりあつかう重厚なプログラムだったが、授業を参観し授業後の検討会にも出席してみて強く感じたのは、講師の真摯な態度と有能な補佐員に支えられたプレFDの成熟だった。実はコーディネーターが心配したのは、講師があまりに自分の研究最前線を語りすぎて、受講者が置き去りになるのではないか、ということだった。その心配はほとんど杞憂だったというのが私の印象である。実際、講義は高度の内容を含んでいた。しかし検討結果をすぐに共有化しフィードバックする補佐員と講師の努力によって、受講者のリフレクション・シートには難解さを嘆くものはあまり見当たらなかったのである。こうした授業を受講する学生はそもそも一回生でも少々歯ごたえのあるものをもとめていたのではないかと、いう感じがした。この意味でプレFDは私にとって、文学部の学生とODに敬意をあらたにする機会にもなったのである。これは想定外だった。



文学研究科教授 吉岡 洋  
哲学基礎文化学系ゼミナールコーディネーター  
文学研究科教授 福谷 茂



行動・環境文化系のゼミナールでは、前期・後期とも各専修(心理、言語、社会、地理)から数名ずつの講師に各2回ずつ、自分の研究を紹介する内容の講義をしてもらった。パワーポイントを使った講義が多く、内容が豊富であるだけでなく面白かつ分かりやすく、受講者の評判も悪くなかった。2回の講義を見る限り、どれもさして改善の余地があるように思えないほど完成された印象を与える立派な講義であった。今後の課題は、概論のような講義を1年ないし半年にわたって教え続ける基礎体力作りと、講義の内容を理解するための努力を受講生からどのようにして引き出すかであるように思われた。また受講者の立場から考えると、行動・環境文化系の4つの専修の、統一性のない講義の連続がどれほど受講に耐えるのか心配になった。なお講義を担当する人たちからは、いろいろな専門の話聞いて良かったという声が聞かれた。



行動・環境文化系ゼミナールコーディネーター  
文学研究科教授 吉田 豊

基礎現代文化系ゼミナールは、1、2回生のための導入的専門科目であり、博士課程を修了した若手研究者が、自分が現におこなっている研究をふまえて、後輩達に対して現代文化系の学問についてわかりやすく講義することを目的としている。

このような授業には「相互に関連性のうすいこまざれ授業となり、体系的に欠ける」デメリットが予想され、私もそれを危惧していた。しかし、実際に2年間授業を参観してみると、必ずしもデメリットとはいえないと気づかされた。そもそも現代文化系なるものに定形はなく、極端に言えば、この授業を担当しているような若手研究者層が、それぞれの時代感覚と学問意識にもとづいて日々実践してきたその研究営為の総体によって形作られるものである。その多様な断面を提示することは、まさに現代文化系の核心を伝えるものにほかならないのだ、と。

そう感じるにいたったのは、もちろん講師達が授業に注いでくれた熱意と努力のおかげである。彼等は、初学者である学生に向けて伝えるには、研究とは異なる論理展開やデータの処理が必要であることをよく理解し、さまざまな工夫をこらした。プレFDプロジェクトに参加していなければ、おそらくこれほど高い教育意識はもちえなかったのではないか。これからの大学教育の第一線を担うのは彼等であることを考えると、これこそがFDであろう。



基礎現代文化系ゼミナールコーディネーター  
文学研究科教授 永井 和

## 2010年度文学研究科プレFDプロジェクトスケジュールと授業テーマ

### ■前期スケジュール

行動・環境文化系ゼミナール  
2010年4月8日～2010年7月15日 毎週木曜日1時限  
検討会 10:20～10:40

- ◆授業テーマ◆
- 松野 豊 「動物の視覚について」
  - 浅田晃佑 「発達心理学 (子どものコミュニケーション能力の発達1)」
  - 浅田晃佑 「発達心理学 (子どものコミュニケーション能力の発達2)」
  - E. Evseeva 「理論言語学 (言語学の諸分野・卒業論文のテーマの選び方など)」
  - 「理論言語学 (不定表現の分析: 理論言語学の諸分野における分析方法)」
  - 田村早苗 「ことばの意味を捉える: 日本語の時制分析から」
  - 酒西栄司 「社会学方法論 (集合行為/社会運動研究)」
  - 「社会運動の社会学 (グローバル化と「新しい公共」)」
  - 朝田佳尚 「社会問題を斜めから見る-社会学は監視カメラの広がりという現象をどう捉えるか-」
  - 木村至聖 「文化遺産の社会学: その理論的背景」
  - 「産業遺産のフィールドワーク: 「軍艦島」を事例として」

哲学基礎文科系ゼミナール  
2010年4月8日～7月15日、毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

- ◆授業テーマ◆
- 藤田大智 「「原因」とはなにかーギリシャ哲学と現代」
  - 大西琢朗 「フレイグの論理主義-「数学の哲学」入門」
  - 太田 徹 「「自律」とはなにかーカント哲学入門」
  - 杉山卓史 「芸術分類論-「美学」入門」
  - 辻内宣博 「西洋中世における自然学-中世思想入門」

基礎現代文化系ゼミナール  
2010年4月8日～7月8日 毎週木曜日5時限 16:30～18:00  
検討会 18:00～18:20

- ◆授業テーマ◆
- 富永 望 「戦後天皇制の出生」
  - 鹿 雪登 「自民党内閣中派と戦後の日中関係」
  - 溝上宏美 「歴史を通じて移民問題を考える-イギリスを事例に」
  - 佐藤夏樹 「ラティノーアイデンティティの形成」
  - 有賀暢迪 「18世紀ヨーロッパの科学と文化・思想」
  - 中尾 央 「文化進化論について」

前期文学研究科プレFDプロジェクト研修会  
2010年8月5日(木) 13:30～17:00

### ■後期スケジュール

行動・環境文化系ゼミナール  
2010年9月30日～2011年2月3日 毎週木曜日1時限  
検討会 10:20～10:40

- ◆授業テーマ◆
- 柴田陽一 「地理的表象からみる京都の近代」
  - 福浦一男 「タイの宗教と社会」
  - 佐々木祐 「地域に生きる人々: 先住民について」
  - 金 京愛 「言語を対象することによる発見: 日本語を見直す」
  - 安部麻矢 「フィールドワークの言語学」
  - 中村千衛 「文法的「性」について」
  - 渡辺剛太 「様々な動物の錯視について」
  - 田邊亜登 「視覚認知の情報処理と視覚の意味と記憶」

哲学基礎文科系ゼミナール  
2010年10月7日～2011年2月3日 毎週木曜日2時限  
検討会 12:00～12:20

- ◆授業テーマ◆
- 佐々木祐 「自由意思と決定論の問題」
  - 佐金 武 「時間概念の探求: 現在主義の観点から」
  - 城阪典治 「西田幾多郎の生涯と思想: 西田哲学入門」
  - 鶴 真一 「私の成り立ちと他者との関係」
  - 堀川敏彦 「キリスト教とユダヤ教」

基礎現代文化系ゼミナール  
2010年10月14日～2010年12月16日 5時限 16:30～18:00  
検討会 18:00～18:20

- ◆授業テーマ◆
- 田中泉史 「生物学から世界を眺める: 科学哲学への誘い」
  - 杉本 舞 「コンピューティング史入門: 「世界最初のコンピューター」とは?」
  - 井上 治 「近代日本における芸道思想の展開」
  - 小林敦子 「1930年代の思想と文学」
  - 川崎 陽 「帝国日本と植民地朝鮮: 朝鮮にとっての日本、日本にとっての朝鮮」

後期文学研究科プレFD研修会  
2011年2月24日(木) 13:30～17:15

## 研修会プログラム

- 13:30 開会式**  
開会の挨拶：FD 研究検討委員会委員長 田中每実  
司会：高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈
- 13:35 セッション 1：自己紹介**  
参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想
- 13:45 セッション 2：ビデオ視聴**  
講義ビデオの視聴
- 14:00 セッション 3：個人ワークと発表**  
ワークシートとリフレクションシートを用いた自分の講義の振り返り  
解説：高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之
- 14:20 セッション 4：学生の声の紹介**  
受講生に対するインタビュー結果の紹介  
文学研究科教務補佐員 小城拓理・三宅岳史  
高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之
- 14:35 セッション 5：ミニ講義「大学授業をどう創るか」**  
高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代
- 14:55 ディスカッションのテーマ発表とグループ分け**  
テーマ 1：授業におけるメディアの活用  
テーマ 2：学生の多様性にどのように対応するか  
テーマ 3：学生を学びに動機づけるには  
テーマ 4：学びを促す教材づくり
- 15:15 セッション 6：グループディスカッション**  
グループディスカッション (30 分)  
ミニミニ講義 (5 分)  
テーマ 1：高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈  
テーマ 2：高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之  
テーマ 3：高等教育研究開発推進センター特定准教授 及川恵  
テーマ 4：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代  
グループのまとめ (20 分)
- 16:10 セッション 7：全体ディスカッション & まとめ**  
司会：高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之
- 16:45 閉会式**  
閉会の挨拶：文学研究科長 赤松明彦  
修了証授与：FD 研究検討委員会委員長 田中每実
- 17:00 情報交換会**



## 研修会参加者からの感想

### ■良かった点・参考になった点

- ユニバーサル段階にある現在の日本の大学教員に求められていることが、歴史的に理解できたこと。FDが就職先や公募時に非常に重要視されてきていたことは分かっていたのですが、それを改めて確認することが出来ました。
- 他の系の状況がビデオやディスカッションで理解できたのは良かったと思います。授業をしている間は、自分たちの系のやり方のようなものが固まっていたのですが、いい意味でそれとは違う方法や雰囲気があるのだと感銘することができました。授業の多様性を知るために貴重な機会でした。
- 他の研究室の院生と交流する機会があったというのは本FDの最大の長所だと思います。また、今回の研修会だけで言えば、文学研究科の先生方と話す機会を得られたのが新鮮でした。他の研究室は近いようで遠い存在でしたが、今後は交流も増えるのではないかと思います。
- 授業映像やディスカッション、発表などの一連のうまく構成された流れ自体が、将来、就職した大学でFDを担当することになった際に役立つと思います。研修会自体が、発表・作業・議論など、学生を巻き込むような授業の仕方のサンプルになっているように思え勉強になりました。

### ■改善したほうがよいと思われる点

- 「学生の声の紹介」(インタビュー)が少なかった。非常勤先などでアンケートによる授業評価を受けることはあるが、授業後のインタビューによって感想が聞ける機会は貴重。インタビューの時期や依頼の仕方の工夫などをして、対象者をなるべく増やし、講師へのフィードバックをもらえるように参考になると思う。学生にもFDに参加しているという意識を持ってもらえるとなおよいと思う。
- 討論の議題ですが、もう少し、内容を限定したほうが良かったかもしれません。私は「多様性にどう対応したらよいか」という課題を選びましたが、そもそも「多様性」とは何か、学力の多様なのか、関心の多様なのか・・・というところから議論をすることになり、時間が若干空費されてしまった感があります。
- これはないものねだりかもしれませんが、研究重視の京大PDの関心ごとのなかには、京大とは状況が異なる底辺校や卒業生がほとんど就職する大学での教育実態がどのようであるのかということがあるかと思っています。動機づけが難しいそのような大学で実際に授業をされている方のお話を聞くことができれば、参考になるかと思えます。

## 文学研究科スタッフによるプレFDプロジェクトの評価



文学研究科研究員  
田林千尋

文学研究科プレFDプロジェクトは、担当講師と研究員・教務補佐員の双方にとって有意義な取り組みである。実際に授業をする他にも、他の授業を参観し、検討会に参加することによって、様々な授業法を知り、自らの授業を客観的に見ることができるようになる。このような経験と知識は、現在の大学が求める教員像に近づくために有益である。また、同プロジェクトに参加することで他専修のODとのつながりが生まれ、広い視野を得ることもできる。

今後は、授業の内容や方向性の事前設定について改善が期待される。講師の専門研究と基礎知識の教授量のバランス、京大文学部の文化に即した授業と一般的な大学での授業を想定した授業のどちらを目標とするかといった問題については、授業が始まる前に全体で検討、決定しておくべきである。

この一年半の取り組みで、プロジェクト参加者の授業への意識は高まったと感じる。今後も、継続的な取り組みが望まれる。



文学研究科教務補佐員  
小城拓理

プレFDの最大の利点は、OD同士が相互に授業研究を行えることである。教育実習を前提としない大学教員に授業研究を行う機会は皆無なので、よりよい授業を構築するためにプレFDは有効である。だが、スタッフから見て問題点も無いわけではない。それは、このプレFDの講師を対象とした事前研修会が無いことである。実は、大学での授業経験がないことから、授業を行うことへの不安を訴える講師もいた。もし事前研修会で、例えば前年度の講師の授業

風景を録画したのを見ることのできたならば、不安の解消に繋がったのではないだろうか。最後に、今後の展望として、このプレFDの輪を京大のみならず、他大学にも広げたい。現実的には、これに参加した多くのODは京大以外の大学に就職するだろう。そこで、多種多様な学生を対象とした授業を創っていくために、他大学の学生及びODを対象としたプレFDの経験を積むことも必要ではないだろうか。大学コンソーシアムを活用するなど、他大学との連携を模索すべきと思われる。



文学研究科教務補佐員  
満上宏美

京都大学文学研究科において若手研究者の教育技術を向上させること目的に実施されているプレFDプログラムに参加した。非常勤講師職を得ることができなかった私にとって、本プログラムは、研究中心であった大学院と、大学教育という二つの世界の間にあるギャップを埋めるステップとして有意義であったと思う。他の講師の授業を参観し、検討会で話し合うことを通じて講義のやり方などについてイメージを掴むことができ、学生や参観者からのリフレク

ションシートや授業ビデオを通じて自ら授業を振り返ることで、説明不足のところや、自分の癖を自覚する機会が得ることができたことは非常に良かった。

ただ、プレFDに否定的な参加者がいるのも事実である。自由な学風とされる京大で研究者として育った若手にとって、プレFDが「教育への余計な介入」として映るのも仕方ないかもしれない。しかし、現実には京大のような研究大学に職を得られる若手はほんの一握りである。この認識のギャップをどう埋めるのかということが今後の課題ではないかと感じた。



文学研究科教務補佐員  
杉山卓史

一言で言って、このプレFDプロジェクトは、多様な授業および講師を知る機会として、きわめて貴重だった。このプロジェクトを通じてはじめて知り合った講師も少なくなかった。授業はそれぞれに興味深く、研究上のインスピレーションを得る機会にもなった。

また、授業後の検討会が、当該の授業そのものの検討の場となっただけでなく、担当講師や参観者がそれぞれ異なる高等教育機関での教育経験を持ち寄る情報交換の場となっ

たことも、よかったと思う。

その一方「京大で」プレFDをする意味は何か?と常々考えさせられた。このプロジェクトは「大学で教えるための練習」であって決して「京大で教えるための練習」ではない、と私は理解している。それゆえ、「自分の研究成果を発表する場として、京大生ならば理解してくれるであろう仕方」(=特殊講義として)臨むべきではない、と考えていた。しかし他方で、今日の前にいるのは、紛れもなく京大生であり、聞き手の属性を考慮して話をすべきであるのは、大学での授業に限らずコミュニケーション一般の基本である。このアポリアは、どう解消されるのだろうか?

## 受講学生の声：学生インタビューから

- ★1回生が普通受けるような、全学共通科目よりももうちょっと踏み込んだような内容になっているという印象を受けています。授業内容にしても、レポート課題にしても、突きつめてその分野のことを学ぶことができるのがおもしろいな、と思う。(2回生 哲学基礎文化化学系ゼミナール履修)
- ★若手の研究者の最新の研究、何をやっているのかがわかって、それはすごく興味深かったですね。(2回生 現代文化化学系ゼミナール履修)
- ★若い先生が熱心に教えてくれるのがよかった。この授業は毎回行くのが楽しみで、自分から入れ込んで受ける感じがした。自分の興味以外のことについても面白く聞けて、いろいろな分野に関心が広がり、勉強したいと思うようになった。リフレクション・シートがある授業はほとんどないので、これがあってよかったと思う。(2回生 現代文化化学系ゼミナール履修)
- ★私は、いろんな事を聴きたいというタイプなんで、一人の先生につき2回の講義というのは、いろいろな話を聴くことができるので良かったです。(2回生 行動環境文化化学系ゼミナール履修)
- ★リレー講義なので、各担当の先生によって専門が大きく異なる。このような様々な専門を少しずつ学ぶことのできる授業は、自分の専修を決める時の参考になると思います。(2回生 行動環境文化化学系ゼミナール履修)



FD研究検討委員会では、高等教育の動向に関わる情報共有や京都大学内の各部局で取り組まれているFD活動の情報交換を図るために、2010年度に3度の「勉強会」を開催いたしました。

## 第1回勉強会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post01.php>

2010年6月30日(水)、第1回の勉強会が開催されました。

まず、田中毎実FD研究検討委員会委員長(高等教育研究開発推進センター長)より、勉強会の趣旨とFDの基本的な考え方についての概説がありました。引き続き、2010年度に実施予定の「新任教員研修」と「京都大学学生学習調査」に関して、高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授、溝上慎一准教授より、海外・全国の動向も踏まえた紹介がありました。なお、当日の発表資料など、詳細については、上記URLより参照できます。

新任教員研修につきましては、9月3日(金)に実施され、それにつきましては本誌に詳細が報告されていますのでそちらをご参照下さい。また、学生学習調査に関しては、来年度以降の実施に向け、「自学自習」の教育理念をもつ京都大学の2005年調査が紹介され、授業には比較的多く出席しているが、授業外学習の貧弱さが浮き彫りにされた調査結果なども紹介されました(右表参照)。

その後、質疑応答、及び、それぞれの部局の立場からの意見交換も行われ、このような勉強会を継続していく意義を感じさせる会となりました。



### 全国の旧帝大生・京大生の授業学習時間 (2回生後期)

		全国の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1	全然ない	6 ( 2.1)	10 ( 0.9)
2	1時間未満	3 ( 1.0)	6 ( 0.5)
3	1~2時間	5 ( 1.7)	16 ( 1.5)
4	3~5時間	23 ( 8.0)	66 ( 6.1)
5	6~10時間	19 ( 6.6)	134 (12.4)
6	11~15時間	51 (17.7)	228 (21.2)
7	16~20時間	73 (25.3)	266 (24.7)
8	20時間以上	108 (37.5)	352 (32.7)
	合計	288 (100.0)	1078 (100.0)

16時間以上の合計 62.8% 57.4%

(\*)薬由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析  
(\*\*)山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生(N=1091)を抽出して再分析

## 第2回勉強会

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post02.php>

2010年12月2日(木)および12月8日(水)に、第2回・第3回勉強会が開催されました。今回は2回に分けて、①各部局のFDの現状と課題、②各部局から全学に提供できる知見、③各部局が期待する全学からの支援、について各委員から報告があり、出席者間で情報共有をおこないました。各部局の報告資料は、上記URLから参照できます。

なお、報告部局は、第2回が、文学研究科、教育学研究科、経営管理大学院、理学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、エネルギー科学研究科、情報学研究科、地球環境学堂、経済研究所、第3回が公共政策大学院、薬学研究科、法学研究科、経済学研究科、農学研究科、生命科学研究科、生存圏研究所でした。

各部局からは、授業アンケートや学生調査などの結果に基づいた教育の現状と課題、FDに関わる研修会やワークショップ開催の現状、各学部・研究科のカリキュラムの流れの中での今後のFDの課題などが報告され、質疑なども活発に行われました。

授業アンケートなどは各部局においてそれぞれの特徴に即しつつルーチン化されてきているものの、作業の効率化に関する課題も残されており、大学全体としてどういう支援のあり方が望まれるか、今後の検討課題のいくつかも浮き彫りにされました。また、京大の特徴でもありますが、プレFD(大学院生を対象とした教育研修)や英語による授業体制作りなどにも関心が寄せられ、先行している部局への質問が相次ぐなど、部局間の交流の兆しも垣間見られました。

### 全国の旧帝大生・京大生の授業外学習時間 (2回生後期)

		全国の旧帝大生 (京大生を除く)*	京大生**
1	全然ない	6 ( 2.1)	31 ( 2.9)
2	1時間未満	21 ( 7.3)	111 (10.3)
3	1~2時間	52 (18.0)	221 (20.5)
4	3~5時間	85 (29.4)	328 (30.4)
5	6~10時間	61 (21.1)	206 (19.1)
6	11~15時間	31 (10.7)	69 ( 6.4)
7	16~20時間	4 ( 1.4)	33 ( 3.1)
8	20時間以上	29 (10.0)	81 ( 7.5)
	合計	289 (100.0)	1080 (100.0)

5時間以下の合計 56.8% 64.1%

(\*)薬由美子科研(2006年実施)、2年生(N=329)だけを抽出して再分析  
(\*\*)山田礼子科研(2005年実施)、京大生2年生(N=1091)を抽出して再分析



## 新任教員教育セミナーとは？

新任教員教育セミナーは今年度初めて、「試行」として実施しました。このセミナーの目的は、今年度から京大の教員となり授業を担当されている方を対象に、<京都大学らしい教育とはどのような教育か>を考え、<そうした教育を行うためにどのような教育リソース・サポートがあるのか><大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか>を知っていただくことにあります。前期の教育経験をふまえながら、全学、部局、個々の授業という異なるレベルで京都大学の教育について理解・議論できるようなプログラムを構成しました。来年度からは本格実施する予定です。研修の様子は京大 OCW (<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/center-for-the-promotion-of-excellence-in-higher-jp/02>)にもアップされていますので、ぜひご覧ください。

## 概要

日時：2010年9月3日 13:00～18:30

場所：京都大学百周年時計台記念館

参加人数：48名

内訳：教授9名、准教授12名(うち特定4名)、  
講師6名(うち特定2名)、助教21名(うち特定1名)

## 2010年度新任教員教育セミナープログラム

**13:00 開会式** (司会・進行：高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作)

**13:10 セッション1**：ミニ講義1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」  
教育・学生担当理事 西村周三

**13:30 セッション2**：ミニ講義2「京都大学の教育サポート・リソース」  
カウンセリングセンター長 青木健次  
高等教育研究開発推進機構共通教育推進課専門員 中澤和紀  
図書館機構(附属図書館)参考調査掛長 北川昌子  
情報環境機構(学術情報メディアセンター)教授 中村裕一

**14:30 セッション3**：ミニ講義3「全学共通教育・各部局の教育的取り組み」  
全学共通教育少人数教育部会会長 野田公夫  
文学部教務補佐員 関師宣忠  
国際交流センター長 森純一

**15:15 休憩**

**15:30 セッション4**：グループディスカッション「京大でどう教えるか」

◆ ディスカッションテーマ / 事例紹介

- 1：「大講義をどう行うか？」人間・環境学研究科教授 小田伸午
- 2：「レポート作成をどう支援するか？」附属図書館准教授 古賀崇
- 3：開講せず
- 4：「学生を授業にどう巻き込むか？」医学研究科講師 森本剛
- 5：「学生の学力の低下・多様化にどう対応するか？」農学研究科教授 宮川恒
- 6：「教育の国際化にどう対応するか？」経営管理研究部教授 小林潔司
- 7：「自学自習・授業外学習をどう促すか？」工学研究科教授 鉦井修一
- 8：「評価をどう行うか？」高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作

**17:00 セッション5**：ラップアップ

**17:50 閉会式**

挨拶：高等教育研究開発推進センター長 田中每実





## 旧高等教育教授システム開発センター及び高等教育研究開発推進センターの 企画による公開授業・検討会

1996～1998年度 第Ⅰ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

1999～2003年度 第Ⅱ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

	講義名	講師	日時	場所
通年 公開	「ライフサイクルと教育」 全学共通科目A群※	田中 每実 高等教育教授システム 開発センター教授 ほか 〔リレー式〕	毎週月曜日 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～	楽友会館2階

※セメスター制への移行に伴い、2002年度から「ライフサイクルと教育A」（前期）、「ライフサイクルと教育B」（後期）として実施

■第Ⅰ期・第Ⅱ期公開実験授業プロジェクトの詳細については、

「大学授業のフィールドワーク-京都大学公開実験授業-」（京都大学高等教育教授システム開発センター編 2001年3月 玉川大学出版部）、

「京都大学高等教育叢書19 平成15年度公開実験授業の記録および公開実験事業8年間の中間的総括」（平成16年3月）ほかをご覧ください。

### 2004年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「デジタル制御」 工学部専門科目（3回生対象）	萩原 朋道 工学研究科教授	12月1日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:15～17:30	電気総合館1階 大会議室
第2回	「経済原論ⅡB」 経済学部専門科目	八木 紀一郎 経済学研究科教授	12月7日(火) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:10～13:30	法経0番教室
第3回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	12月13日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第4回	「電気電子工学概論」 工学部専門科目（1回生対象）	大澤 靖治 工学研究科教授	1月11日(火) 5時限 16:30～18:00	工学部 電気総合館3階 中講義室

### 2005年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	5月23日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第2回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	6月20日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第3回	「現代制御論」 工学部専門科目 (情報学科3回生配当)	山本 裕 情報学研究科教授	10月20日(木) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:00～13:20	工学部総合校舎 213号室
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田中 每実 高等教育研究開発推進 センター教授	11月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第5回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	米谷 淳 神戸大学 教育推進機構教授	11月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第6回	「酵素化学」 農学部専門科目 (食品生物科学科3回生配当)	井上 國世 農学研究科教授	12月14日(水) 1時限 8:45～10:15 検討会 10:30～12:00	農学研究科2号館 応用生命科学専攻 第4セミナー室
第7回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教授	12月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2006年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育A」 全学共通科目A群	井下 理 慶應義塾大学 総合政策学部教授	6月5日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階
第2回	「現代の大学・大学生論A」 全学共通科目A群	溝上 慎一 高等教育研究開発推進 センター助教	7月4日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	吉田南総合館 共25
第3回	「心理学概論B」 全学共通科目A群	大山 泰宏 高等教育研究開発推進 センター助教	11月21日(火) 1時限 8:45～10:15 検討会 16:20～17:30	吉田南構内 4共21
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	矢野 裕俊 大阪市立大学 大学教育研究センター教授	12月4日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2007年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「教育評価の基礎I」 全学共通科目A群	大塚 雄作 高等教育研究開発推進 センター教授	5月22日(火) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:35～15:45	吉田南1号館 共311
第2回	「工学倫理」 工学部専門科目(4回生対象)	水谷 雅彦 文学研究科教授	10月12日(金) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	電気総合館中講義室 (吉田南構内)、 電気第2講義室(A1-131) (桂野バス)【遠隔講義】
第3回	「学力・学校・社会」 全学共通科目A群	松下 佳代 高等教育研究開発推進 センター教授	10月25日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:00	吉田南1号館 共206
第4回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	近田 政博 名古屋大学高等教育 研究センター准教授	11月19日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:30	楽友会館2階

### 2008年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「生活と環境の化学」 全学共通科目B群	山本 行男 高等教育研究開発推進 センター教授	5月8日(木) 3時限 13:00～14:30 検討会 14:40～15:40	共北25 (吉田南構内)
第2回	「英語ⅡA(E2P02)」 全学共通科目C群	Craig Smith 京大外国語大学教授	6月16日(月) 5時限 16:30～18:00 検討会 18:05～19:00	共西02 (吉田南構内)
第3回	「教育史概論I」 教育学部専門科目	辻本 雅史 教育学研究科教授	11月26日(水) 2時限 10:30～12:00 検討会 12:05～13:40	教育学部320 (本部構内)
第4回	「診断治療学総論」 医学部専門科目	森本 剛 医学研究科講師	1月20日(火) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:20～17:20	臨床第1講堂 (病院地区)

### 2009年度 公開授業・検討会

	講義名	講師	日時	場所
第1回	「ライフサイクルと教育B」 全学共通科目A群	田口 真奈 高等教育研究開発推進 センター准教授	12月7日(月) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	共北12 (吉田南構内)
第2回	「診断治療学総論 －医療で求められる コミュニケーション－」 医学部専門科目	平出 敦 医学研究科教授	1月12日(水) 4時限 14:45～16:15 検討会 16:30～17:30	山内ホール (芝蘭会館)

---

**2011年3月 京都大学FD研究検討委員会発行**

京都大学のFDに関する取り組みについては、

**FD研究検討委員会のホームページ**

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

公開授業・検討会を企画される場合は、

**教育推進部教務企画課(電話 075-753-2430)** まで連絡ください。

---



2010 Mutual Faculty Development